70

伊東玄朴の改名とシーボルト事件

西留いずみ
國學院大學大学院 文学研究科 史学専攻 博士課程後期 4 年

伊東玄朴は佐賀藩出身で天保のはじめ，江戸に蘭学塾・象先堂を開き坪井信道，戸塚静海とともに江戸の三大蘭方医と称された医者であり蘭学者である．寛政 12（1800）年，肥前神崎郡仁比山村に生まれた．本姓は執行勘造である．当初漢方を学んでいたが文政 5（1822）年，蘭方を志し佐賀藩蘭学の祖と呼ばれる島本良順の門人となる．数か月後，長崎に立ち和蘭通詞猪俣伝次右衛門の元でオランダ語を学んだ．翌文政 6（1823）年オランダ商館付の医師として来日したシーボルトにも師事している．文政 9（1826）年には猪俣伝次右衛門一家とともに上京，同 11（1828）年，本所番場町で蘭学教授を開始，当時流行していた馬脾風の診療で玄朴の名は知れ渡る．天保 2（1831）年 12 月，江戸在住にして佐賀藩主鍋島直正の侍医となり一代侍として召し抱えられ，同 4（1833）年には下谷御徒町泉橋通に転居，診察所と蘭学塾を兼ねた象先堂を開く．象先堂開設まで順調に蘭学者としての道を歩んだかにみえる玄朴であるが，文政 11（1828）年のいわゆるシーボルト事件に巻き込まれ進退が危うい時期があったことは周知の事実である．一方で当時，玄朴が瀧野玄朴と名乗っていたことはあまり知られていない．本報告では玄朴が瀧野姓を名乗った経緯と時期の特定を史料に基づき論じたい．これまで高野長英からの書状等により文政期後半，玄朴が瀧野性を名乗っていたことは一部知られていたが，その経緯や時期については明らかとなっていなかった．

まず，瀧野性はどこに端を発しているのか長く疑問であったが鍋島文庫の白石鍋島家の記録から以下のことが判明したので簡単にまとめてみる．実は瀧野家は佐賀藩の大配分である白石鍋島家の藩医瀧野文礼の家であった．玄朴は文政 8（1825）年 1 月，文礼の養弟としてその籍に入り瀧野玄朴となっている．師である猪俣伝次右衛門の長男源三郎が同 9（1826）年 6 月，天文台詰通詞の役につくためともに出府する 1 年前のことであった．文政 10（1827）年 6 月，玄朴は江戸からいったん佐賀へ帰るがその際，幕府天文方の高橋作左衛門から地図を預かり長崎のシーボルトの元へ届けている．シーボルト事件の発端である．同年 11 月，玄朴は再度 350 日間の出府を願出る．浅草の安達長俊のところへ行くためというのがその理由であった．この安達長俊というのは足立長雋の当て字であろう．足立は丹波篠山藩医で特に産科に優れた著名な蘭方医であった．翌文政 11（1828）年 8 月，玄朴は再び江戸から佐賀へ戻っているが 11 月に今度は植村俊庵の従者として江戸へ立っている．この植村俊庵は佐賀で代々藩医を勤める上村春庵の当て字と思われる．この佐賀での短い滞在の間，瀧野文礼は玄朴の養弟としての縁を切っている．9 月 28 日のことであった．その 3 カ月後の 12 月，シーボルトは出島に幽閉され，関係者の逮捕が続く．玄朴が瀧野文礼から縁を切られた理由がシーボルト事件との関係によることは想像に難くない．ちなみに玄朴が従者として共に江戸に上った上村春庵は玄朴が天保 4（1833）年に開いた象先堂の 1 人目の塾生として門人帳に記載されている．

本報告で明らかとなった点を 4 点以下に挙げる．まず 1 点目は玄朴が一時期白石鍋島家中であったこと，2 点目は玄朴が文政 8（1825）年 1 月に白石鍋島家侍医瀧野文礼の養弟となり同 11 年 9 月 28 日に縁を切られるまでの間瀧野玄朴と名乗っていたこと，3 点目は文政 10 年から 11 年にかけて足立長雋の元で学んでいたこと，4 点目は文政 11（1828）年 11 月，上村春庵の従者として再出府し，その上村は象先堂の一番目の門人となっていることである．佐賀藩蘭学に関しては『伊東玄朴傳』や『鍋島直正公傳』などの記載が通説となっている場合も多いがそれらの書物はほとんど典拠を示していない．佐賀藩蘭学者の一次史料は非常に少ないが史料発掘に努力しそれを典拠として正しい史実を追求したい．